# 空は青い

比良岡美紀

２０１５年2月

（１）

「あの人、女がいるみたいなの」
　アイスコーヒーを飲み干してマユミは言った。
――因果応報。でも口には出さず、無言でアイスティーを飲む。
「あんたじゃないの」
「何が」
「だから、あの人の女」
「はあ？」
マユミがため息をつく。
「あの人最近、あんたを誉めるんだもの」
「何、それ。別れた女房の何を誉めるっていうの」
「あいつは頭がよかった、お前も勉強しろって、毎日、毎日。おかしくなりそう」
　まさか――。頭がいいだけの妻は要らない。そう私に言った男が？
「そうだ、ねえ」
マユミが笑みを見せた。私は軽いめまいを覚え、こめかみを抑える。
「なんで空が青いか知ってる？」
空がなぜ青いか？　もちろん知ってるわ。
「虹の七色のうち、青色だけ拡散せず地上に届く。だから、空は青く見える」
「さすがねえ」
「レイリー拡散って言って――」
「――あたしは、空が青いのに理由なんてないって言ったの。そしたらあの人、何て言ったと思う？」
「……さあ？」
「そんなだから甥っ子に馬鹿にされるんだ、って。それも憐れむように！」
　マユミは深くため息をつき、両手を額にあてた。ため息をつきたいのはこっちだ。
しばらくしてマユミが言った。
「どうしても勉強しなきゃダメ？」
「さあ……どうかしら」
「あたし勉強なんか大嫌いだし、それであんな、水商売みたいなことしてたのよ、あの人だって知ってるのに」
そうね、たしかに。でも私には関係ない。アイスティーを飲み干し、私は席を立った。
「待ってよ」
　マユミの声がする。一瞬ひるんで、立ち止まりかけた。でも力を振り絞って、右足を前に出す。続いて左足。また右足。左、右、左、右。ただ足を前に出すことに集中して、私は一階へ降り、カフェの戸に手をかけた。ノブを回せば、外へ出られる。そのとたん、思いきり後ろへ引っ張られ、ノブから手を離した。振り返ると、マユミが頬を上気させて立っている。

「ひどいわ、話の途中で席を立つなんて」
　あんたの話なんて聞きたくない。だって愚痴ばっかりなんだもの。心からそう思ったけれど、そんなことを言ったら愚痴がエスカレートするだけ。夫を奪っただけでは飽き足らず、何かにつけ私を呼び出しては愚痴をこぼす。奪った男の元妻に、いったい何を求めているのだろう。
「ねえ、お願い。あんたしか友達いないのよ」
　たしかに。こんなことを誰彼かまわずしてるなら、友達なんてできないだろう。だからといって、私がつきあう義理はない。だいたい何だって、毎回つきあってしまうのだろう。小さくため息をついて私は言った。
「ごめん、急いでるの」
マユミは急に申し訳なさそうな顔になって、ああ、ごめんなさい、とつぶやいた。私のほうも何だか申し訳ない気持ちになって、じゃあまた、などと言ってしまう。言った瞬間、心の中に後悔の嵐が吹き荒れる。
「わかった。また電話するね」
　マユミの言葉に、うん、とにっこりほほ笑んで、でも心の中では後悔の嵐がいっそう強く吹き荒れたまま、ノブを回して外へ出た。そして目の前にある改札を通り、私鉄のホームへ上がって、ようやく長い、長いため息をつく。
　ああ――。なんで毎回、こうなってしまうのか。もうあんたには会いたくない。二度と連絡しないでほしい。そう言えばいいだけなのに。
　ホームにうずくまりたい気分だったが、ちょうど電車が入ってきたので乗り込んだ。平日の午後だからか、各駅停車だからか、乗客はまばらだ。目についた席に腰をおろし、また長いため息をつく。
　ドアが閉まり、ゆっくりと動き出した。各駅停車で終点まで。一時間の「長旅」だ。私は座席に背中をあずけて目を閉じた。
　マユミのことを知ったのは五年前。夫の帰りが目に見えて遅くなり、問いただすと俺は忙しいんだとわめきちらした。何が忙しいのと尋ねても、さっぱり要領を得ない。さてはと思ったが証拠がなかった。そんなとき、食卓に放置された携帯電話に気づき、つい中を見てしまったのだ。
　見るも地獄、見ないも地獄。そんな言葉をどこかの掲示板で見たけれど、まったくもって真実だ。見なければよかったと、今でも思うことがある。いっぽうで、真相が分かったのだから見てよかったのだと、自分を正当化する気持ちもどこかにあった。

「……どうするのがよかったのかな」
　口をついた言葉に自分でも驚いて、車内を見まわす。でも、もともと乗客が少ないうえに、みんなスマホを見ていたり眠っていたりで、聞かれた様子はなかった。よかった――。ホッと安堵のため息をつき、また目を閉じて背中を預ける。
　結局、協議離婚することになり、弁護士立会いのもとで話し合いをした。そのときのマユミの言い草がふるっていた。
「あんたの代わりに旦那さんの面倒みてあげてたのよ。それなのに慰謝料払えだなんてひどい。むしろ感謝してほしいくらいだわ」
呆れて何も言えなかった。世の中にこんなことを言う人間がいるなんて――。夫はそのとき、無言で私たちのやりとりを見ているだけだった。
　家に帰ると、ふつふつと怒りが込み上げてきた。完璧な妻だったなんて言うつもりはない。至らないところは色々あったと思う。でも直すチャンスも与えないまま浮気だなんて。それもよりにもよって、あんな頭の悪い女と――。そう言ったら夫は、いら立ちを隠そうともせずに言った。
「お前は頭はいいかもしれないけど、それだけだ。あいつは頭は悪いが、お前と違って気立てはいいし、何をしたら俺が喜ぶかよく知っている。女としては完璧だ」
「何ですって！」
私があの女に劣っているというの？　料理だって掃除だって、あなたの望むようにしていたつもりよ。仕事もあったし、完璧じゃないかもしれない。でもあなたが何かのときに言ったことを覚えていて、それをできるだけ再現するようにしたじゃない。それのどこがいけないっていうの。ねえ、どこがいけないのよ！
　まくし立てた私に、夫はうんざりした様子で言った。
「お前のそういうところ、すべてだよ」
お前といても安らげないんだ。男にとって家庭は安らぐ場所だ。妻が安らぎを提供してくれないなら、別のところで安らぎを得る。俺の場合はマユミだった。それだけさ。
「それだけさ、って――」
なおも言葉を続けようとする私を、夫はもういいと言うように右手で遮り、寝室へ向かった。
「ちょっと――」
寝室のドアノブに手をかけ、ああ、と夫が振り向く。
「悪いが、ソファーで寝てくれないか。集中して資料を読みたいんでね」

　ああ――。思い出したらまた嫌な気分になってしまった。いつもそう。分かっているのに。思い出してもいいことなんかないって。でもなぜだか、反芻するように、時間をおいて何度もあのときのことがよみがえる。
　ため息をつき、目を開けた。発車ベルが鳴り、ドアが閉まりかけたところで突然止まる。しばらくして仕切り直すように、ドアがゆっくりと閉まった。
「駆け込み乗車は大変危険ですのでおやめください。電車が遅れ、ほかのお客様のご迷惑にもなります。次の電車をご利用ください」
　アナウンスが終わると電車は動き出した。乗客は相変わらずまばらで、何事もなかったかのように、スマホから目を離さない。ある人はアナウンスの最中、立ち上がって網棚に放置された雑誌を取り、腰をおろして読みはじめた。
　この時間帯だからかもしれないが、駆け込み乗車など誰も気にしていないようだ。それにしても駆け込んだ人は、そんなに急がなければいけなかったのだろうか。どんな用事があるのだろう。
　仕事の面接？　プレゼン？　そうかもしれない。どちらも人生を左右する大問題だ。
　そこまで考えて思い出した。今朝納品した原稿の直しがあるかもしれない。連絡はたいていメールだけど、いつもと違う人が連絡してくることもある。その場合はファックスだ。いずれにしても、帰ったら確認しなくては。
ふう、とまたため息をついた。夫と出会ったのは、大学を卒業して就職した翻訳会社だった。私の教育係を務めたのが彼で、とても熱心に教えてくれた。
　翻訳した原稿を見せるたび、うまいなあ、天才じゃないか、と持ち上げられ、多分にお世辞が入っていると分かっていても、誉められると嬉しいもので、仕事にも熱が入る。彼の教育の賜物と言うべきだろう、納期の管理もこなせるようになり、私はあっという間に主任となった。
　彼は自分のことのように喜び、もう僕の指導は必要ないねと言ったが、私は不安だった。これからもご指導よろしくお願いしますと言ったら、彼は嬉しそうにうなずいた。翌年、私は昇進して彼の上司になった。
　　プロポーズされたのも同じころだ。きみと温かい家庭を築きたい、退職して僕をサポートしてくれないか。そう言われたとき、彼の役に立てるのが嬉しくて、一も二もなくイエスと言った。

今思えば、追い越されて悔しかったのだろう。家庭に閉じ込めてしまえば威張っていられると思ったのかもしれない。でも会社はそうさせてくれなかった。退職後も外注先として仕事の依頼が相次ぎ、夫は次第に不機嫌になった。

帰宅したとき翻訳の仕事をしていると――納期の関係でそういうこともたびたびあった――書斎にこもって出てこなくなった。それを見て私も意地になり、いっそう仕事に執念を燃やした。あれだけ私の能力を買ってくれ、後押しをしてくれた人が、結婚したとたん、仕事をする私にいら立ちを隠そうともしない。まるで手のひらを返したようなその態度に、戸惑いと怒りを覚えた。

父の法事で久しぶりに実家へ帰ったとき、つい愚痴をこぼしたら母は言った。

「女は頭がいいだけじゃ、幸せになれないのよ」

そのときはよく意味が分からなかった。小学生のころ、テストでいい点を取って喜ぶ私によかったねと言ってくれたし、中学生になって英語のスピーチコンテストで入賞したときも、母はとても喜んでくれた。それらすべてを否定されたようで寂しかったし、反発も覚えた。

夫が浮気して、相手がマユミだと知ったとき、そういうことか、と初めて腑に落ちた。でも、それを認められるかどうかはまた別。マユミに負けたなんて、一生認めることはできない。母にそんなことを言っても、頭がいいだけじゃダメなのよ、と言われておしまいだろうけど。

マユミのことを考えたら、また嫌な気持ちになった。なんであの女は私に執着するのだろう。これからもずっと振り回されるのかと思うとうんざりする。まったく――。

じっとりした暑さを感じて顔を上げると、ドアが開け放たれていた。そういえばさっきから、蝉の鳴き声が聞こえていた気がする。乗客はほかにもいたが、乗ったときとは違う人たちだ。あの人たちはもう降りて、反対方向へ行く人たちが乗ってきたのだろう。早く降りないと、電車が動き出してしまう。

ホームの階段を降りて改札へ向かいながら、ふと、母は幸せだったのだろうかと考えた。結婚前、母は通訳の仕事をしていた。でも私が子供のころ、母はいつも家にいて、学校から帰ると手作りのおやつを食べさせてくれた。記憶にあるかぎり、母が出かけていたのは町内会の集まりがあるときや、母の母、つまり祖母のところへ行っているときだけだった。

　改札を出て、商店街をぶらぶら歩く。夕飯の買い物をする人たちで、どのお店も賑わっていた。私も何か買って帰ろう。
　スーパーに入り、売り場をひと通り見てまわる。何か、今日は作る気がしない。ご飯だけ炊くことにして、お惣菜でも買おうかな。
　レジに並び、財布の中身を確認する。しまった、お金おろしてない。しょうがない、カードで払おう。
　レジでカードを出し、クレジットでよろしいですかと言われてうなずく。少量なので袋に入れてもらい、それを持ってスーパーを出た。
　母が仕事に復帰したのは、私が高校生になったころだ。父が亡くなり、母は外資系企業で通訳として働きはじめた。来日した本社の役員に同行するアテンド通訳や、会議通訳をしていた。
　生活のためというのが大きかったと思う。でも私には、いつも仕事の楽しさ、やりがいを話してくれた。その様子を見て、結婚しても働きたかったのかもしれないと私は思った。
　そういえば中学生のころ、一度尋ねたことがあった。お母さんはもうお仕事しないの、と。そうしたら母はニコニコしながら、今もしてるわよ、家族を守るお仕事、と答えた。はぐらかされた気がしたけど、それ以上聞くことはできなかった。本当はどうだったのかな……。
　帰宅すると、留守番電話のランプが点滅していた。原稿の件かな。お惣菜を冷蔵庫に入れ、電話が来るのは初めてだな、と思いながら再生ボタンを押すと、一番聞きたくなかった声が流れてきた。
「マユミがちゃんと話さなかったようですまない。雄太の小学校受験を視野に入れて、勉強に力を入れたいと思っている。週に一、二回、家庭教師を引き受けてもらえないか。謝礼は多くは出せないが、なるべく努力する。考えておいてほしい。また連絡する」
　ピーッと音がして、電話のあった時間を告げる。ついさっきだ。スーパーで買い物していたとき。
買い物してよかった。この電話には出たくなかったから。でも気になることを言っていた。マユミが話さなかったようで、って。どういうこと？
もしかしたら――。

　今日呼び出されたのは、子供の家庭教師の件？　私を呼びとめたとき、話の途中って言ってたけど、あれはそういうことだったの？　ならそう言えばいいのに。それに最初からその件で会いたいって言われれば、私だって嫌な気持ちにはならない。たぶん、ならないと思うけど。
　それにしても……妻としては失格でも、家庭教師としては合格か。頭はいいけどそれだけ、という事実を突き付けられたようで、ますます気が滅入る。
　私と離婚したあと、元夫はマユミと結婚して、翌年子供が生まれた。だからまだ三歳くらいだと思うけど、もう小学校受験なのか。私たちには子供がいなかったから、何だかぴんとこない。
　いや、違う。私には、子供がいない。元夫には今、子供がいる。私には、夫もいない。恋人すらいない。――ダメだ。完全に回復不能。ああでも、メールだけは確認しなくちゃ。
　動こうとしない身体に鞭打つようにして、仕事用の机へと向かう。パソコンの前の椅子に腰をおろし、電源を入れた。
　そのときインターホンが鳴った。はあい、と言いながら、急いでメールソフトを開き、送受信ボタンを押す。受信しているあいだにと、インターホンのモニターを見にいくと――。
「母さん？」
「ごめんね突然。今大丈夫？」
「うん、大丈夫。ちょっと待って」
解錠ボタンを押して一階の玄関を開ける。冷蔵庫を開け、氷ができていることを確認すると、玄関へ急いだ。エレベーターの前で待っていようと思ったのに、ドアを開けたら母がいて驚いた。母も驚いたようで、鳴らしてないのに、と目を丸くしている。
「エレベーターの前で待ってようかと思ったの。間に合わなかったけど」
ああ、と母は言って、にこやかに笑った。その瞬間、周囲の空気がふんわりと、涼やかに和らいだ気がした。暑いなか歩いてきたはずなのに、汗ひとつかいていないようだ。
　いつも思うけれど、母の笑顔は素敵だ。私もこんな素敵に笑えたら、別の人生があったかも。
「暑かったでしょう。麦茶あるよ。炭酸がよければ、買ってこようか」
玄関でサンダルを脱ぐ母にそう言うと、ううん、と母は首を横に振った。いらないのか。それなら、と私は麦茶を飲むことにして、母を居間へ案内する。居間はあまり暑くならないので、冷房しなくても大丈夫かな。ソファーをすすめたあと、メールの受信状況を確認するため、仕事部屋へ行った。

　最新のメールが担当者からのものだった。
〈今回も非常に丁寧な翻訳をありがとうございます。お蔭さまでクライアントの方からも高い評価をいただいています。引き続きよろしくお願いいたします〉
オッケー、ってことね。やった！　任務完了！
　はあー、と大きく息を吐き、冷蔵庫から麦茶を取り出した。母さん本当に麦茶いらないの、と尋ねると、いらない、と返事があったので自分のグラスにだけ氷を入れ、麦茶を注ぐ。そしてちびちび飲みながら居間へと向かった。
「何です、歩きながら飲んでお行儀の悪い」
　居間へ足を踏み入れたとたん、母の叱責が飛んできた。
「いいじゃない、ここは私のうちよ」
「うちの中だろうが外だろうが、そんなことをしてはダメ」
うるさいなあ、と思いつつ、はあい、とグラスをテーブルに置く。ここは一応、おとなしく従っておこう。母の隣に腰をおろし、で、何なの、と私は言った。
「うん」
　母は言ったが、下を向いたまま話そうとしない。
「どうしたの」
「うん」
「うん、うん、ばっかりじゃわからないよ。どうしたっていうの」
「うん……」
「母さん、何だか変よ。具合でも悪いんじゃないの」
私がそう言ったとたん、母は大きなため息をついた。
「何、どうしたの」
驚いて尋ねると、母は私を見て言った。
「あなたは本当に、仕事一筋なのねえ」
「え、何？　どういうこと」
　母はまたため息をついて、覚悟を決めたように、実はね、と切り出した。
「再婚することになったの」
「再婚って、誰が」
「わたしに決まってるじゃない」
「ええっ！」
「失礼ね、そんなに驚かなくてもいいでしょう。わたしだってまだ六十になったばっかりよ」
「そうかもしれない、いやそうだけど、いやでもそれを言ったら私だってまだ三十そこそこ、いや半ばだし、っていうかーー」
私は大きく深呼吸した。
「相手は誰。私の知ってる人？」

　母は首を横に振った。
「あなたの知らない人よ。最近出会ったの」
「どこで」
「どこだっていいじゃない」
「よくないよ。母さん騙されてるんじゃないの。貯金だってけっこうあるんだし気をつけないと」
　母はまた大きくため息をついた。
「やっぱり……そう言われるんじゃないかと思った。でもおあいにくさま、お相手はお金に不自由していません」
「なんだ、じゃあ普通にいい話なわけ？」
「そうよ、普通にいい話。だから祝福してよ」
「祝福して、って――そんな、強制されてもねえ」
　母はぷっと噴き出した。
「何よ、私何か変なこと言った？」
「いいえ、変なことは言ってないわ」
「じゃあ何で笑うのよ」
「変わってないな、と思って」
「私が？」
　そう、と母はうなずいた。
「いくつになっても、わたしのかわいい娘」
最後のほう、母の声が少しうわずって、私は泣きそうになった。
　子供のころ、毎日おやつを手作りして、私の帰りを待っていた母。学校であったことをまくし立てながら食べる私に、そんなに急がなくてもおやつは逃げないわよ、と笑いながら言ったっけ。仕事に行くようになっても、おやつには必ずメモが添えられていた。
　働かないのか、なんて聞いたくせに、母が家にいなくなると、どうしようもなく不安だった。父は平日ほとんど家にいなかったから、話し相手は母だけだったし、父が亡くなって、母もいないと本当にひとりぼっちで、もしこのまま母が帰ってこなかったらどうしよう、なんて考えたりした。
　もう高校生だったから、おやつなんて、と思ったこともあるけれど、たまにおやつがないと不安で仕方なくて、なんで作ってくれなかったの、と母を責めることもあった。
　　頭では分かっていた。仕事なんだから、自分の都合で動くことなんてできない。でも感情を抑えることができなかった。そんなとき母は、本当に申し訳なさそうにごめんねと言って、次の日はより手の込んだおやつを作ってくれた。

　母のおやつのおかげで、私は安心して高校生活を送ることができた。大学に入って一人暮らしをしても、就職しても、ふと食べたくなるのは、母の手作りのおやつだった。
　その母が、再婚する。
　どんな人なのだろう。母を幸せにしてくれるだろうか。
「ねえ、母さん」
溢れそうな涙を隠そうと、天井を見ながら私は言った。
「新しい旦那さんは、空が青いね、って母さんが言ったら、何て言うかな」
そうねえ……と母は考え、しばらくして言った。
「そうだね、青いね、って言うかな」
「そうなんだ」
ああ、ダメ。本当に涙があふれる。
　よかったね、母さん。それはレイリー拡散と言ってね、なんて言う人じゃなくて。この先、間違ってもそんな人を選んじゃダメよ。その人、頭はいいけど、ただそれだけの人だから――。
　立ち上がって母に背を向け、両手で涙をぬぐう。それから両手をジーンズの腿のところでごしごしとやって、母のほうに向きなおった。
「おめでとう」
言いながら右手を差し出すと、母はにっこり笑って私の手をとり、心から嬉しそうな様子で、ありがとうと言った。母の笑顔がまぶしくて、思わず目をそらす。
　私も母さんみたいになりたかった。仕事もしながら子育てもして、子供に仕事の楽しさを伝えたかった。頭がいいだけじゃダメ、本当だよね。でもいつか、母さんみたいに笑えるようになって、今度こそ幸せな結婚がしたい。だから長生きしてね。新しい旦那さんにも会わせてね。みんなで空を見上げて、空が青いね、きれいだね、って言おうね。
「母さん……」
　よかったね。本当に、よかった。
　私がそう言うと、母は何度もうなずいて、ありがとうね、と繰り返した。ありがとうは、私が言うことだよ。幸せになってね。幸せに――。
「泣かないでよ。変な子」
そう言いながら、母も涙声になっている。そうね、変だよね。
笑いながら顔を上げると、カーテンの隙間から真夏の青い空が見えた。

おわり

空は青い
http://p.booklog.jp/book/96291

著者：比良岡美紀

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/miki-hiraoka/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/96291

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/96291

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ